

採 蓮

Siren

第十八号

No.18

開館二〇周年記念 歴代館長によるシンポジウム

歴代館長よもやま話

熊谷市長 皆様、こんにちは。今日は千葉市美術館開館二〇周年記念のシンポジウムにお集まりいただき、誠にありがとうございます。

この市民会館の大ホールにたくさんの方々がお集まりいただきましたが、私も大変楽しみにし、これほど贅沢な企画はなかなか無いのではないかなと思っています。ちなみに、今日お集まりの方々と、千葉市美術館に行ったことがある方はどのくらいいますでしょうか……ほぼ全員ですか。もし、来られたことが無い方はぜひ、この後千葉市美術館にお越しいただければと思います。

私自身も、市長になる前、なった後も含めてほぼ毎回のように企画展も含めて見させていただいております。本当に千葉市美術館ならではの、他の美術館ではなかなか出来ない角度から、視点からの企画展を毎度開催していただき、市民はもとより市外、県外にも大変多くのファンの方がいる、千葉市にとっても大変誇らしい美術館だと思っています。

それもこれも、何と言っても今日お見えでいらつしやいます初代館長である辻先生、二代目の小林前館長そして現館長の河合先生、この御三方の様々な積み重ねであり、その下で学芸員の方々が日々研鑽し、そして企画を進めている賜物だと思っています。

今日は千葉市が誇る、そして日本の美術史でも誇る御三方、そして普段から交流の深い河野先生にコーディネーターとして参加していただき、千葉市美術



シンポジウム会場入口



挨拶する熊谷市長

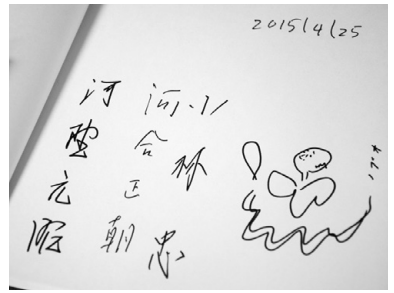
司 会／河野元昭(京都美術工芸大学学長)
挨拶／熊谷俊人(千葉市長)

パネラー／辻 惟雄(MIHO MUSEUM館長、初代・当館館長)・
小林 忠(岡田美術館館長、二代・当館館長・河合正朝現・当館館長)

館について、所蔵品や展覧会について語っていただきます。たぶん、二度と出来ない企画ではないかと思っています。

今開催されている所蔵品展の図録に、御三方の座談会が掲載されています。もうお読みになった方がいらつしやるかも知れません。私も楽しく拝見しましたが、どうぞこのシンポジウムも存分にお楽しみいただければと思います。聞くところによると、御三方のサインが入った図録が限定販売されるそうで、希少価値の高い図録となっております。

この二〇周年記念のシンポジウムについて予算審議をした時、こういうシン



『千葉市美術館 所蔵作品100選』(2015)に記された歴代館長と河野元昭氏のサイン



(左より)辻初代館長、小林二代館長、河合現館長

ボジウムは大事なんだ、二〇年間の歩みとこれからを考えるためには必要だからということ、市長査定で話した記憶があります。私は普段、財政健全化のために厳しく査定を行っています。こういうシンボジウムの予算は確保しないといけないと思いました。そのようなわけで、今日はいろいろな思いがこめられているシンボジウムでございますので、大いにお楽しみいただき、まわりの方にもお伝えいただき、千葉市美術館のファンが一人でも増えるきっかけとなる二〇周年にしていきたいと思います。

どうぞ、よろしくお願い致します。

河合 皆さん、こんにち。千葉市美術館の開館は、一九九五年の十一月三日ですから、まだ満で二〇年にはなっていないませんが、四月から新年度という事で、二〇周年の様々な行事を始めております。この会場は一、〇〇〇名入るということで、ご聴講頂ける方が少なかつたらどうしようかと思っております。落語にありますよね。おいでになった方が前の方で三、四人で寝ていたりする(笑)。そんな心配をしておりましたが、日ごろからの温かい御支援がまさに現実化したようで、こんなにもたくさんの皆さんにお集まり頂いたことに、

本当に感激しております。

美術館が一人前に育つには、結構時間がかかります。一朝一夕には出来ない。初代、二代の館長さんは大変苦労されました。この美術館もスタート時点には若い学芸員の皆さんたちが、よくわからないまま手探りでやっていました。今は何を任せても一人で出来るようになりました。先ほど、市長さんが仰ったように、全国的にも認められるような美術館に成長して、来館された皆さんにも御満足いただいています。

僕は、小林さんの後を引き継いで四年目になります。おかげ様で、ほほうまく行っているところから館長になりましたので、さしたる苦労ありません。小林さんから「口なんか出さなくて皆に任せておけば何でも出来るんだよ。まあ、夜には一緒にお酒を呑んであげなさい」と言われ、そんな感じでやっております。

幸い、千葉市美術館は多くの皆さんに御支援のおかげで、ここまで参りました。これからの二〇年は、新しく後継者を養成するとか、次々とその時期に合う企画展をやって行くことに意を傾けたいと思います。欧米では、「美術館は市民と共に有り、市民と共に歩み、市民と共に発展する」などと言われております。しながら、日本ではありていに申してこのような文化行政というのは国をはじめ、なかなか日の当たらない、市民の目にもすぐにあまり効果が上がらない仕事のようなのです。

最近、時々話したり、ものに書いたりしますが、美術館という所はそもそも来館者が「優れた芸術作品を見せていただく」と



挨拶する河合現館長

お願いする場所ではないのです。もつと市民に近く、今の言葉でいうと生涯学習や高齢者福祉にも十二分に役立つ施設である訳です。記憶に残っているような古い建物を観たり、懐かしい景色が描かれている絵や写真を観ると、記憶が甦り高齢者の方々が新たな力を得る、元氣におなりになるというような事も言われております。決して敷居の高い場所ではないことを、皆さんにはぜひ御理解頂き、御協力を頂いて、皆さんと共に美術館は歩を進めて行かなくてはならないのだと日頃から自分に言い聞かせております。我々スタッフ一同は丸となって、皆さんと共に歩む事の出来る美術館にしたいと思いますので、今後とも御支援を賜りたいと思います。

これから、私も加わって「よもやま話」を行います。何を話してもいいという事ですが、そのへんのところは本日の司会をお願いした河野元昭先生がいかにもコントロールして下さるかです。ちよつと心配なのは、ご自身が暴走するんじゃないか(笑)。まあ、それはそれで楽しいと思います。時間いっぱいお楽しみ頂ければ有り難いと思います。先程、市長さんからも御案内がありましたけれども、図録も立派なものが出来ておりますのでお手にとつて御覧になつて頂きたい。と同時に、この後お時間がある方はぜひ私達と一緒に美術館にお出で頂いて、千葉市が二〇年間に集めた貴重な美術品——その中にはチラシの僕の言葉のように「こんな作品があったのか」というものがたくさんございます——を、皆さんが御自分でお集めになった美術品なんだと思ひながら楽しく御鑑賞頂ければ、学芸員・職員達も望外の喜びであると思います。本日はどうも有難うございました。また今後ともよろしくお願い致します。

*

河野 皆さん、御機嫌よろしゅうございます。

今日は千葉市美術館開館二〇周年記念シンポジウムという事で、どのような

内容で話そうかと私達で相談しましたけれど、結局よもやま話が一番面白く、また皆さんにも楽しんでいただけるのではないかなという結論に至りまして、「三館長よもやま話」というタイトルに致しました。

しかし、勝手にやつてしまうと最後が心配になりますから、今までに一番印象に残った展覧会・作品、あるいは館長として苦労した事・楽しかった事に焦点を当てて話そうと決めました。

それでは早速ですが、辻さんから始めていただきます。そうですね、一人最長三〇分ということ。

辻 そんなに長く話せないよ。

初代という事でこの席におりますけれど、一九九五年に館長になりました。もうじき八三歳になります。アタマの使用期限が切れそうで、お見苦しい事と存じます。固有名詞がどうも出て来ない。でも初代が出て来ないと格好がつかないという事で、馳せ参じてまいりました。よろしくお願い致します。

それで、印象深い事はたくさんあつて……特に最初、私は京都の国際日本文化研究センターにいたんですが、故がありまして本当に開館の直前ぐらいに館長を仰せつかった。

着任すると、開館を記念して巨大なプロジェクトが着々と進行中でした。それが、「喜多川歌麿展」(2)。

当時はバブル崩壊の時期ですけれど、千葉市はその崩壊が遅れたんです。それで予算がまだたっぷりあった。私はそれを聞いて、来る気になったんですから(笑)。それで、「これは色々買えるだろう」と思っていたのですが、来た時



河野元昭氏

に言われていた予算が半分になって、その次の年にはまたその半分、次の年にはまた半分……私が任を解かれる時には一、〇〇〇万円ぐらいになってしまっていた。

まさにバブル崩壊の過程の中で私は館長になったわけですが、幸い準備段階で相当いいものを買っております。私が来てからは、目ぼしいものは何も買えなかったんですが。準備段階で購入したものが、今度の一〇〇選のほとんどではないでしょうか。私が来てから購入したのは、例えば曾我蕭白《虎溪三笑図》⁽³⁾。これは良いものが買えましたけれども、こういうものは数えるほどしかありません。それから円山応挙《富士三保図屏風》⁽⁴⁾。これは破墨というか、フワーツとした、応挙の絵とは思えない珍しい作品です。これは安かったので購入した(笑)。一〇〇選を繰りますとそんなものがチョコチョコと出て来ます。

しかし、渡辺崋山の《佐藤一斎像画稿 第三》⁽⁵⁾第七⁽⁶⁾、これはすごいもので。崋山の肖像画は完成作よりも画稿の方がはるかに良いと言われているんで、それが画稿の段階のものが五点もある。これは一体どうしたことかと思つたら、小林先生の時に……

小林 違う違う。

辻 河合さんの時？

河合 小林さんの時に僕が紹介した。

小林 正しくはですね、河合さんのお友達から……河合さんの一種の……何て言うんだろう、あれは。河合さんを次期館長には予定していなかったけれども、前もつてのプレゼントみたいな形で紹介してくれたんだね。

辻 ああ、御就任祝いで。

河合 いや、僕はそういうことを企んで先に送り込んだわけじゃないから。

辻 いやあ、これは重要文化財になってもいいよ。これは寄贈と言うことにな

るの？

小林 寄贈。

辻 素晴らしいじゃないの。これで千葉市の財産がグッと増えた。

購入した作品は、まだバブルの時代で高かったけれども、棟方志功の《釈迦十大弟子二菩薩》⁽⁷⁾なんて、今買ったら……この間、売立て目録を見ていたら一〇億円とか出ていた。西山さんという係の方が近代版画を専ら集めていて、五回にわたって自分で集めたものを基に近代版画展をやった⁽⁸⁾。あれを本にしたら、日本近代版画のすごい記念になる。棟方志功はどんどんうなぎのぼりに値が上がりついているんですね。これが千葉にあるという事はすごい事です。そういうものを西山さんが随分買われて、功績大であります。西山さんだけをお誉めするわけではなくて、他の人も誉めなければならなくなるんでこの辺にしておきますけれど(笑)。

それで印象深い、思い出の展覧会……今、細見美術館——京都の方の美術館ですが——というのがありまして、そのコレクション展をやった時に、その細見さんのコレクションだけでは「ちよつと足りないかな」と思い、アメリカのクリーブランド美術館に行つて、渡辺始興の《燕子花図屏風》を借りて来た⁽⁹⁾。これは私が想像していたよりもはるかに良いもので。

河野 傑作ですね。

辻 これは京都で開催される琳派四〇〇年展で借りるんじゃないかな。

河野 ちよつと、海外の作品はなかなか難しくて。

辻 ああ、難しくなったか。

河野 ですから、細見美術館展に展示された時が最後になるんじゃないかと思う。今、海外のものは難しい。

辻 これは海外に流失した琳派の作品の中でも、惜しいものだと私は思いました。

河野 今、『國華』でクリーブランド美術館の特輯号を出そうとしていて、辻さんにチャーマン・リー論を書いてもらった。小林さんがその号でこの作品について解説を書いています⁽⁹⁾。

本日皆さんにお配りした私の紹介文に、『国華』主幹とありますけれど、そこに「前」と入れておいて下さい。今は小林さんが主幹です。

辻 まあまあ(笑)。

最初の歌麿展はさすがに予算をかけて力を入れただけに、五万人ぐらい入ったかな？ 随分長い間入場者数一位の記録だったんですけど、その次に「Tranquility」という現代美術の展覧会⁽¹⁰⁾をやったら、本当にガラガラで。しかも時期が二月の寒い時で、tranquilityというのは英語で寒々とした静寂さと言ったような意味なんです。まさにその通りの展覧会になっちゃった。それで担当の学芸員の方も、ガックリで。その時にはいい作品が出ていたんですよ。杉本博司という、今有名な写真家が海の水平線を撮った連作とか⁽¹¹⁾。

河野 あの時出ていましたね。

辻 傑作ですけども、そういう作品が出ていた。しかし、なかなか……私がいた頃の千葉市の方々は、展覧会なんてのは東京に行つて観るものだと思つておられたらしくて(笑)。まさか、こんな千葉で展覧会なんてものがあるとは……こちらはいろいろ企画を立てて頑張つたはずですけど、やつてもやつてもお客さんが来ないという(笑)。そう言う状態で小林館長にバトンを渡した事を覚えております。

それはさておき、その中でも「東山魁夷展」⁽¹²⁾は比較のお客様がたくさん来られて。東山さんが最晩年の頃です。市川のお宅にお邪魔したんですが、残念ながら東山さんはご病気でお会いできなかった。間もなく亡くなられたんです。しかし、奥様が一所懸命協力して下さい、この時には本当にいい作品が出ています。

河野 そうですね。

辻 これを観た人は本当に良かったと思う。特にこの《残照》⁽¹³⁾。

私、これは感激しました。これは戦後間もなくの作品で、狭い家の二階で制作していて、出来上がった時に持ち出そうとしたけれど大きくて表に持ち出せないで窓から下ろしたというエピソードがある。これは東山さんの最高傑作の一つだと思っております。

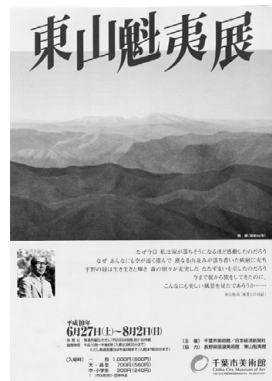
それから、もう一つは《道》⁽¹⁴⁾です。これは余りにも有名な作品で、もちろん展覧会に出品して頂いた。改めてこの作品を見て感激していたんですけど、そのときの展覧会の特色は、本画を描くための下絵・デッサンの類がたくさん展示されたことです⁽¹⁵⁾。《道》の場合でも草の一本一本まで本当に綿密に写生された下絵が残っていて、「これぐらいの準備があつてああいう傑作が生まれただな」と思いました。

思い出の展覧会はそのくらいにしておきますが、館長として辛かった事、逆に楽しかった事……私の場合は辛かったという印象は妙に無くて、楽しかったのは、当時の学芸員の皆さん、とくに女性学芸員の皆さんが若くてピチピチ瀧刺としておられたんです。これが私にとつて大変、目の保養というか(笑)、まあ、今でも皆さんお元気でいらつしやいますけれども、当時は特に。

河野 辻さんも若かったわけだね。

辻 まあ、比較的ね。今よりは。

それで、これからの美術館に望む事は……美術館つてのは、ここの美術館？ 美術館一般？



「東山魁夷展」(1998)チラシ

河野 そうですね。どちらでも良いでしょう。

辻 一般なんて言う大変な事になる。この美術館は今、私の頃に較べれば羨ましい位で、リピーターもだんだん増えて、二〇周年記念にこれだけの方がホールを埋めるといふ、私の時には信じられない現象が起こっているの……やっぱりこれは、二代目館長の小林さんのご尽力・功績だと改めて脱帽致します。

河野 これから千葉市美術館に望む事は特に無いという事でよろしいでしょうか？

辻 やっぱり、私の時の経験ですけども、どんどん購入予算が削られてゼロ同様になったというの……あれ悲しい事は無いんで。やっぱり学芸員は予算が無いと、新しく買う事が出来ない、やる気がだんだん無くなってくる。小林さんの時もそういう状況の中で良く頑張った。本当に偉いと思う。ですけど市長様にお願いをして、これからは少しでも予算をつけていただきたいと……

(会場拍手)

河野 拍手、有難うございます。

辻 と、言う事でございます。

河野 はい、有難うございました。

初代館長、辻さんでした。皆さんご存知のように、辻さんは「奇想」ですね、特に伊藤若冲の発見者として知らない人はいない研究者です。そして今年……去年になりますか、『奇想の発見』という一代記、オートバイオグラフィを新潮社から出版しました¹⁶。今、Kindleでも読めるようです。皆さん、ぜひ一読をお薦めしたいと思います。

続いて、二代目の小林館長にお願いしましょう。

小林 小林です。皆さん、お久しぶりです。

今、辻先生が仰られたんですけど、美術館がスタートして間もない時期は本当に、お客様がなかなか館に来て下さらない事で、館員一同悩んだ事を思い出します。館長に就任したばかりのある時、市内の高等学校の父母会へゲストとして招かれて、先程辻先生が仰ったような事をちょっと申し上げたんです。「皆さんは東京の方ばかり見てるんじゃないですか、地元にも、皆さんの市の美術館があるんですよ」といふような悪態をついたんです(笑)。そうしたら、終わってから数人のお母様達が詰め寄って来て、「私達は誇りに思っているんですよ。何度も行つてます。そんなに東京ばかり見ていません」と言われて、「ああ、大変失礼しました」と。逆に励まされ、嬉しかった事を思い出します。

辻先生は準備段階からいわゆる準備室長として開館まで持つて来られたわけなんですけれども、私の頃は一騎当千の館員の方達が、ちょうど充実に入つて来た時なんです。お辞めになられた浅野秀剛さんをリーダーに、その下の人達は皆さん若い盛りで、次々と良い企画を出して徹底的に調査して、充実した展覧会を行う。ほぼ同世代、横並びですから、一人が行うと負けてはいられないってんで、また頑張る。

河野 話に出た浅野秀剛さん、この会場にいるはずだよな。

小林 浅野秀剛、田辺昌子、浮世絵の世界では第一人者、第二人者というような人達が準備段階で集めた浮世絵コレクションは、本当に千葉の誇りとする財産だと思えます。その頃はバブルが弾ける前？ 千葉バブルが弾ける前で、年間の購入予算が何億円とあつたんです。手当たり次第良い物が買えた、羨ましいような時期でありました。

第一回の開館記念展「喜多川歌麿展」は、大英博物館と千葉市美術館、赤ちゃんと美術館が天下の大英博物館と共同で開催¹⁷した。年表にありますけれども、一九九五年の開館記念展は五四、二八七人の入場者があつた。

辻 ちょっと加えますが、この展覧会は実は小林さんが企画して、小林さんと浅野さんでやったような展覧会なんですよ。

小林 いやいや。

辻 私が来た時は、もうちゃんと準備が出来ていて、何もしないで開館にこぎ着けた。それが、事実です。

小林 だったかなあ(笑)。まあ、浅野秀剛とティモシー・クラークという——彼は私が学習院時代の教え子で、第一号の留学生だったんですけど——二人が徹底的に調査してやった展覧会です。その時のカタログは、二冊本が一つの箱に入っているんですけど、今でも歌麿をちよつと勉強しようとしたら、その本を座右に置かなければならないというような大変充実したカタログですが……展覧会が終了する間際になって、大量に追加印刷してしまつたんです。まだ、美術館の運営に慣れていなかった。ですから今でも買えますので(笑)。ぜひ歌麿を愛する方は、一冊。安いものですからお買いになると良いと思います。

辻 あれは、春画が入っていないのが残念なんですけども(笑)。しかし、すばらしい物揃いで。

私が辞める時にも、倉庫に図録がこーんなに山積みになつて(笑)。

小林 抑えて、抑えて(笑)。大英博物館のカタログには、春画がちゃんと載っていたんです。ところが千葉市の美術館ではそこをカットして、陳列も出来なかった。

辻 そうね。



「喜多川歌麿展」(1995)チラス

小林 熊谷市長はとても理解があつて、「小林さん、千葉市美術館で春画展やらないんですか？」と仰つたことを今でも覚えています。その頃はとても無理でした(18)。

私が館長になってから、二〇〇二年に「鈴木春信」展を開催しました(19)。これは田辺昌子さんが担当で、素敵なボスターや図録が出来て。あの頃運営費はまだ潤沢にありましたので、アメリカ国内はもとより、ヨーロッパにまで調査に行き、良質な浮世絵版画をたくさん外国の美術館からお借りする事が出来た展覧会でした。琳派四〇〇年で国立博物館が外国から借りられないつてのは、恥ずかしい。

河野 いやあ。しかし今、如何ともし難い状況になっています。

小林 その四年後の二〇〇六年に、「浦上玉堂」展を開催しました(20)。ブルーノ・タウトという建築家が戦前日本にやって来て、日本に新しい目を注いだ人なんですけれど、彼が玉堂の事を「東洋のゴッホ」と評価しました。それほど自由な心と筆を持っていた人です。私の一番好きな日本の画家であり……この人、酒呑みなんです(笑)。朝から呑んでいたという。私は夜を愛しているんですけど、彼は「卯酒楽」。卯の刻というのは午前六時です。朝起きてすぐ一杯やるという。すごい人ですね。詩人であり、七絃琴を弾く音楽家であり画家でありました。浦上玉堂は楽器も自分で作つたんです。琴をたくさん作つて知人に売る楽器屋さんでもあった。それで相当儲けていたんじゃないかと思うんですが、松尾知子さんが担当の学芸員でしたけれど、その琴を七張も集めてくれました。おかげで、浦上玉堂の全人的な展覧会が出来た。



「浦上玉堂」展(2006)チラス

川端康成先生が所蔵しておられた国宝の《凍雲篩雪図》という、篩に掛けたような雪が降っている寒々とした光景の作品ですが、これを借りるのが大変でした。《凍雲篩雪図》が無い玉堂展は、山葵の無い鮎みtainなものです。ピリツと来ない。で、お願いに上がって展示のお許しを頂いて——確か一週間だけだった——千葉市美術館の会場を飾る事が出来ました⁽²¹⁾。

更にその四年後に、ご記憶の方も多いと思いますが、「田中一村」展⁽²²⁾をやりました。全く無名のまま、奄美の島で亡くなった田中一村は栃木で生まれ、東京で活躍し、千葉に来た。千葉の人達に支援され、助けられて奄美大島に行き、そこで生涯を終えた。現代の浦上玉堂と申しましょうか、自由な、純粋な人だったんです。美術館の年表によりますと、この田中一村の展覧会で開館記念展以来の最高入場者数を更新しました。六一、一六六人。辻先生に会った時に、「とうとう辻さんを超えたよ」と言いました(笑)。

辻 さつき言ったように、歌麿展というのはあなたがやったんだから(笑)。

小林 辻先生はその時、ムツとされまして。「何ッ」という感じで(笑)。「いやいや、田中一村展(の入場者数)は開館記念展を超えましたよ」と言ったんです。

「田中一村展」の頃はちょうどインターネットがメディアとして機能するようになった時期でした。若い人達による「田中一村展に行つてないの?」「今すぐ行け!」というブログの書き込みが相次いだ。

その他にも色々……「橋口五葉展」という素晴らしい展覧会⁽²³⁾は西山純子さんの企画でしたが、鹿児島市美術館と共同で開催しました。橋口五葉は鹿児島の出身で



「田中一村 新たな全貌」展
(2010)チラス

す。夏目漱石の本のブック・デザインをしたり、「新版画」という運動の先駆けとなった人です。その展覧会もなつかしく思い出されます。

余り長くなってもあれですが、館長としてつらかった事というのは、お忙しい熊谷市長が帰られてしまつて……畳み込もうと思つたんですが(笑)、購入費がゼロになつてしまつた事です。今は多少あるの?

河合 多少(笑)。

小林 私の頃は完全に無くなりました。辻先生がさつき言つておられたように、最初は雀の涙ほど付いていたんですが、それで多少。辻さんはやんちゃなものを買つてくれてたんです。若冲とか、蕭白とか。私は根が真面目なものですから、文人画。河野さんが『國華』に書いてくれた中林竹洞の襖絵⁽²⁴⁾とか、浦上玉堂の小さな絵ですけど《東雲篩雪図》の前段階のような絵⁽²⁵⁾を買つて貰いました。

楽しかった事は……館員ばかりではなくて、館を支えて下さる方が現場にたくさんいらつしやいます。シンポジウムの前に司会をやつて下さった方などともそうですが、受付や監視の方、それから何よりも美術館を訪れてくれる市民の皆様、コレクションを寄託・寄贈して下さったりする方々……いま私が館長を務めている岡田美術館は箱根の小涌谷という所にあるんですが、千葉市美術館の友の会の方が来て下さったりします。時々、「千葉市美術館でお会いしましたよ」と、声を掛けてくれる方もいらつしやいます。また、作品購入のお金が無くなつても、そういう多くの方に支えられた事を、大変嬉しく思つております。

辻 ちよつと今、小林さんが岡田美術館の宣伝をされたから……私はいま滋賀県の山の中の信楽という所にある、MIHOMUSEUMという、宗教団体が運営している美術館の館長をしています。そこで今、二〇世紀アメリカの抽象表現主義の巨匠であるバーネット・ニューマンの代表作《十字架の道行き》、

キリストが十字架に磔になるまでに休み休み通った一四の駅を連作で表現したものを展示しております(26)。これは本当に偶然の結果で、私共の美術館だけでやっておりまして、空前絶後の機会ですから、もし現代美術に関心がある方であれば絶対見逃さないように(笑)。

河野 千葉市美術館でも現代美術の展覧会は随分やってらっしゃる。

MIHOMUSEUMは建築が大変素晴らしいですが、千葉市美術館の建物は元々区役所だったんでしょうか？

小林 銀行。

河野 銀行だったんですか。それを大変巧くりノベーションをして、本当に素晴らしい……

辻 建築家の大谷(幸夫)先生で。

河野 そうですか。建築家の御名前は存じ上げなかったけれど、古い建物にリノベーションを行って美術館として使うという事は、日本で早い時期、初期の例でしょう。建物と美術館・ギャラリーが大変巧く行っている。一方、MIHOMUSEUMはI・M・ペイという素晴らしいチャイニーズ・アメリカンの建築家による作品で、これはもちろん新しく建てられたもので、建物も鑑賞の価値があると思います。

辻 千葉市美術館の一階には「さや堂ホール」がありますが、あれは古い建築を残さなければならないというので、一〇〇メートルぐらいエッサエッサと動かした。そのための費用も膨大だったらしいけど。

河野 そうだったんですか。

辻 あの「さや堂ホール」は歴史的記念建造物だからね。

小林 刀の鞘さやと同じ構造になっている、元の銀行の建物を残してその上に新しい建物を被せた。銀行を一度動かしているんです。

辻 「さや堂ホール」でしばしばコンサートを行いまして、「曾我蕭白展」の時

には大野一雄という有名な舞踏家があそこで公演された²⁷。それはなかなかすごい公演だったことを思い出します。

河野 私はそれを見逃したけれど、素晴らしかったでしょう。

辻 ええ。

河野 私は、千葉市美術館は建物、ギャラリー、これも誇るべきものだと思います。

続いて河合さん、お願いします。

河合 「さや堂ホール」についてお話すると、私はひととき古い建築物の保存する運動に関わったことがあります。古い建物の保存にはいろいろな方法がありますが……その一つの考えとして建築にはファサード保存、つまり外側がちゃんと残っていれば良いという考え方があります。鳩山邦夫さんが総務大臣だった時、東京駅前にある中央郵便局の解体工事を一時中止して、外側だけ残した。中はすっかり変わってしまいましたけれど。そういうビルの例はたくさんあります。そのようなビルを我々は「かさぶたビル」と言っています(笑)。残さないよりは残した方が良いかと思う程度で、あまり良くありません。しかし、「さや堂ホール」は鞘の中に入れていたために、全部残っている。これは非常に重要な事です。残すのならそうしなくてはいいけない。ただ「さや堂ホール」の場合、銀行として使われていた後は市の施設となったため、内部は少し変わっていますが、オリジナルな部分がかなり残っています。

古い建築ならば、日本には飛鳥時代に建てられたお寺は今日残っています。近代のものはどんどん壊されるんです。それで果して良いのかどうなのか、これは国の方針が悪いのか、建築屋さんが仕事を増やすための下心なのか、何でも耐震、耐震と言う。でも耐震なんて言ったら、こんな地震国で奈良や平安時代の建物なんか全部潰れている筈なんです。だから知恵を働かせれば何百年でも何千年も建物は残ります。せっかく耐震や免震にしたら、「免震に

使ったあのゴムが悪い」などと言う始末です。その仕掛けは一体誰が行っているのか？ この会場に建築屋さんがおられたら申し訳ないけれど、何かの陰謀があるんじゃないかな(笑)。残そうと思えば建物は残るんです。

建物には、その街にとつてのシンボルあるいはランドマークとしての重要な働きがあります。千葉で生まれて育った、あるいは千葉を訪れた皆さんにとつて記憶に残るシンボル。

先程申し上げた、老人が昔を懐かしむのはその街にある、あるいはかつてあった橋とか建物なんです。「あの時はこうだった」、「あの時はここを市電が通っていた」という事で記憶が蘇る。河野さんの御母様はご高齢ですが、お住まいの大田区では老人に大田区の古い景色を写した写真帖をくれるんです。私は素晴らしい事だと思う。

河野 よく知っているね。

河合 美術館もそういう存在・施設であるべきだと思っています。

私は司会者ではありませんけれども、こちらへんどちよつと河野さんのコメントを訊きたいですね。その後でまた私達が話した方が良くと思います。

(会場拍手)

河野 私は先程話にあつた「喜多川歌麿展」以来、少なくとも千葉市美術館で開催された江戸絵画、近世絵画の展覧会はほとんど拝見していると思います。それから最近拝見した展覧会では「プラティスラヴァ世界絵本原画展」⁽²⁸⁾に感動しました。

絵本というものは日本でも大変古いメディアの一つだと思いますけれど、その伝統が現在の日本作家の中にDNAのように受け継が



「プラティスラヴァ世界絵本原画展」
(2015) チラシ

れていて、素晴らしい作品がたくさんある。この前拝見した展覧会では、グラプリは受賞していなかったけれども、二人の日本人が「金のりんご賞」を受賞していた。その作品を諸外国のものと較べてみると、やはりそこに日本の美、日本人の美意識というものがはつきりと看取される。

この会場にも絵本原画展をご覧になった方がたくさんおられると思いますけれど、千葉市美術館の一つの特徴は版本や浮世絵版画という複製芸術のコレクションが大変充実している事で、これは日本の美術館の中でトップクラスのコレクションだと思います。それをリードして優れたコレクションを作ったのが初代館長の辻さん、二代目の小林さんであり、先程名前が出た浅野秀剛さんであるわけです。小林さんの方から橋口五葉の話が出ましたけれど、今まで話題になつた多くの作品は一点もの、広い意味では「肉筆」と呼ぶべきものですが、複製芸術のコレクションも大変優れたものであり、千葉市の皆さんは誇りに感じて欲しいと思います。

私の最も好きな千葉市美術館のコレクションに鈴木其一の《芒野図屏風》⁽²⁹⁾があります。小林さんがプロデュースした其一の展覧会については後ほどお話ししたいと思います。特に一つ挙げるなら、ラヴィッツ・コレクションです。ラヴィッツさんはアメリカの方で、私は当時横浜で活動していた平木浮世絵美術館でこのコレクションを初めて見て⁽³⁰⁾素晴らしいコレクションだと思いました。けれど、それが一括して千葉に収まった。これは大変良かった事だと思います。この時、千葉が収集しなければコレクションがでんでんばらばら、雲散霧消してしまつたに違いないわけです。これも千葉の皆さんのおかげだと、私は深く感謝をしております。

私は秋田県立近代美術館——頭文字を取ってAKBと言いますが(笑)——の館長を八年ほど務めました。そこで私は職員に「美術館のコレクションは美術館が所蔵しているのではない。県民が持っているもので、それを美術館が預

かりしているのだ」と、よく言いました。千葉市美術館のコレクションも正しく同じであり、所蔵しているのは市民の皆さんなんです。それをたまたま、この美術館がお預かりしている。このような性格が千葉市のコレクションにあるわけで、その点をもっと誇りに思い、お友達あるいは市外・県外の方々に御吹聴していただきたいと思います。

その秋田県立近代美術館のホームページに、「おしゃべり名誉館長」というブログがありますので、ぜひ御覧ください。その過去のおしゃべりにブラティスラヴァ世界絵本原画展のことが載っていますが、私はそこに、この展覧会と千葉市美術館、そして学芸員と市民に対するオマージュを捧げています。

それでは、河合さん(笑)。

河合 ここで河野さんのお話を伺うことが出来て良かったです。

私は先程お話したように、辻さん、小林さんの後を承けて、比較的安定した時期になってから館長になりました。余り苦勞もないし、作品を購入出来ないなんていう事もいわば常態化していましたから、別に悲しくも何ともなかったんですが(笑)。それがどういう事か。学芸課長が「先生、何か購入できるらしいです」と言うから、「それなら例え一〇万円の作品でもいま欲しいものがあるれば購入しなさい」と答えました。要するにこれ、「呼び水」ですから。今ここで何千万円かの作品を購入したいと言ったら莫迦と言われます。「なるべく安いものを買ってから、次々とやるんだよ」と、言っしまいましたけれど。どうなんでしょう、幸い市の御理解を得まして……千葉市も多少経済的に好転したんでしょうか。それはともかく、お二人の時代とは少しは違って来たわけです。

小林さんは大学を出てからのスタートが博物館で、それから大学の先生になった。千葉市美術館の館長さんの時には大学と兼務していらしたんです。この、先程からお話している御三方は学校が一緒で大変親しいんですが、どうい

うわけか僕も仲間に入れていただいて、時々呑んだり何かしている時、小林さんが盛んに「美術館を経験しないと美術史はわかんないよ」なんて(笑)。そうすると辻さんが「羨ましいなあ。東大辞めて東博に行きたい」なんて仰ったりして。そして辻先生がまず、大学を退官されて後、この館長さんになった。「ああ、辻さんが館長になったなあ」、「そうだねえ、いいなあ。河野さん、俺達も行きたいなあ」と言っていた。そうしたら河野さんが大学を定年退職されて、まんまと秋田県立近代美術館の館長になった。「ああ、俺だけ残されたなあ」と思っていたら、嬉しいですね、小林さんが後進に……

河野 後進と言っても、お互い昭和一六年じゃない。

河合 いや、こちらの方が年上なの。僕は誕生日が遅いんですから。

河野 ああそうか。

小林 六ヶ月だけなんです。

河合 七〇歳過ぎて、こんな仕事は無理じゃないかと思っていたら、「まあ大丈夫ですよ」と市の方も仰って下さったんで、その気になっちゃって。

ですからどちらかと言うと、私は自分が館長の時の展覧会なんかよりも、就任前の展覧会の方に強く印象に残る展覧会がいくつもあります。その意味では河野さんと非常に近いです。館長になってからの思い出深い展覧会をあえて挙げれば、一つは「仏像半島」^[31]です。仏像、仏様の展覧会。これも歴代四位ぐらいの入場者数で沢山の方が見えた。沢山人が来れば有り難いし、嬉しい事ですけど、ただそれだけではなくて



「仏像半島―房総の美しき仏たち」展(2013)について語る

……その前にも小林さん？ 辻先生の時に仏像の展覧会をやって、その時は惨憺たるものだったという話らしいですけど。

辻 「房総の神と仏」⁽³²⁾というタイトルでやりましたけれども、それほど惨憺たるものではなかった(笑)。私が館長としての最後の展覧会で、ちょうど展覧会が開いた頃に私は多摩美術大学に移っていましたから尻切れトンボになってしまいました。浅野さんと二人で房総のあちこちの仏像を観て廻りましたが、房総は仏像の宝庫と言うか、飛鳥時代からのすごいものがある事が判って、私の館長としての最後の思い出になっております。

河野 辻さんがやった時は一九九九年。

辻 そうそう。

河野 素晴らしい展覧会でした。辻さんの第一回目の仏像展が発端となって、『國華』という美術雑誌で地方別佛像特輯がシリーズ化されることになったのです。『國華』は明治二二年に岡倉天心が作った、現在まで続く世界で最古の美術雑誌で、この間一四三四号が出ました。『國華』の前にフランスで創刊された *Gazette des Beaux-Arts* という雑誌がありましたけれど、二〇〇二年に廃刊になってしまった。『國華』の約一〇年後にイギリスで *The Burlington Magazine* が創刊され、それは今でも続いています。もうこうなりや、*The Burlington Magazine* が『國華』を追い抜くことは絶対に無いと安心しているんですが——そのシリーズの第一号が安房・房総の仏像で⁽³³⁾、もう一〇回程各地方別に行っており、まだ色々タネはあるわけです。私の故郷である秋田特輯もやって欲しいところですが、これは一冊になるほどの仏像が集まらない様子で、未だに実現していません。

河合 辻先生の時の展覧会が決して内容的に悪かったわけではありませんが、幸い、私の時の「仏像半島」は大変好評だった。その間に、ものの考え方が段々変わって来たということがあるかも知れません。一つには展覧会に展示さ

れたことで仏像をお守りされているお寺のお檀家さんが、改めてその仏像の価値の高さを認識するようになったと、お寺さんに喜ばれたことでしょう。そしてもう一つは、二回目の展覧会では、仏像を空間で見せるといふか、つまりお堂の中の仏像が一つの空間、すなわち世界を作っているということを、展示を通して再現しようと担当の学芸員が試みました。僕も大賛成だったんです。日本の美術というのは、辻先生が「かざり」という概念で仰っておられますけれど、一つのモノだけではなくていくつかのモノが集まって、その時と場所にふさわしい空間的な造形を創り出すという特色があるんですね。組み合わせることで一つの新しい美が生まれるという考え方は、モノを取り合せるという考え方。もちろん仏像や仏堂の莊嚴^{しょうげん}もそうであって、一尊でなく、脇侍^{わきざい}や眷属^{くわんじゆく}が集って仏の宇宙を構成する。そのような視点の新しい展示方法や見せ方を試みたからだったのかと思います。

御存知の方もいらっしゃると思いますが、これが実は現代美術におけるインスタレーションという考え方は、あるモノに他のモノをつけ加える、あるいは既存(成)のモノにアーティストが新しく何かを添える事で両者の調和とか両者が創り出す造形的な世界・空間を提示する。

ここにお集まりの皆さんも、「現代美術?」「どうやって観たらいいの?」と思われるかも知れませんが、須田悦弘^{すだえひろ}という、未だ四〇歳代の若いアーティストは木を素材として花



「須田悦弘展／須田悦弘による江戸の美」展(2012)チラシ

などを彫って、それを色んなところに……例えば、美術館で預かりしている椿の屏風の前に自分で彫った椿を置く。今や彼は大変売れっ子になりましたけれど、この須田悦弘の展覧会（34）など私が館長になってからの印象深い展覧会です。もちろん

ん、彼は他の美術館でも作品を発表していますけれども、千葉市美術館として訴える力のあつた展覧会だったと思います。現代美術を企画しても人が入らないと言われていたのです。

そして須田悦弘は現代美術ですけど多くの人が……僕は学芸員達に、色んな人が色んなところで入場者数の事ばかり言ってくるけれど、そんなものを気にしては駄目だと言っています。テレビでもすぐ視聴率について言いますけれど、本当はそんな事は関係無いのですよ。

辻 ふふふ。

河合 ただ、自分が一所懸命になって良い展覧会を作った時、誰も来てくれないと悲しいです。だから、展覧会を作っている側としては、もちろん多くの方が来て、喜んで御覧いただく事は良いことなんですけれど、「何人入った」という事を目指すような展覧会をやる意味は無い。それは東京国立博物館がやればいい事で、千葉市美術館がやる必要は無いんです。

河野 須田悦弘は素晴らしいアーティストだね。入館者数という事はともかくとして、市民の人に喜んで貰えましたか？

河合 と、思います。だから現代美術でも判り易いというか、辻先生が仰る「かざり」、日本人の美の鑑賞方法としての「かざり」が理解されたと思います。



「酒井抱一と江戸琳派の全貌」展
(2011)チラシ

河野 須田さんはコンテンツポラリー・アーティストとはちょっと毛色が違つて

……

河合 そうそう。

河野 MOA美術館で河合さんが関係された尾形光琳の《燕子花屏風》と《紅白梅図屏風》の両国宝を陳べた展覧会³⁵では、《紅白梅図屏風》の前に梅の……

河合 あの花びらね。

河野 あれも素晴らしかったな。本当に感動しました³⁶。

河合 若く、今的なアーティストの展覧会も学芸員は積極的にやつております。

河野 須田さんは特に千葉市とは関係無いけれども展覧会を開催したわけですね。

河合 うん。それは学芸員の水沼君が大変に関心を持って取り組んだから。

それともう一つ、これは批判として受け取っていたけど困りますが、会場 of 皆さんも非常に関心を持たれ、高い評価を得ている田中一村については。一村の展覧会は沢山の方が来て感動されたけれど、本当に天才だったと思います。当時の東京美術学校、今の東京藝大に入学した。同期生は、先程も紹介された東山魁夷をはじめ、加藤栄三、橋本明治、山田申吾など、その後の画壇をリードする人達だった。

残念なのは、一村は美術学校に入つてすぐ辞めてしまう。

小林 半年ぐらいでね。

河合 これを経済的な理由であると言う人もいますが、恐らく一村は天才児で、同期生のように普通の学校を出て美術学校に入ってから「写生をしなさい」と先生に言われて石膏デッサンなんかさせられることに対して飽き足らない思いがあつたのではないか。何か、もつと刺激的な教育を期待していたと思

うんです。既に彼は一〇代、あるいはもっと小さい時から？

小林 神童と呼ばれていた。

河合 素晴らしい絵を描いている。でもそれは、昔風の絵の習い方、粉本主義だった。手本に倣って描くというやり方です。神童で、当然素晴らしい絵ですから、売れます。そんな売画の生活では貧しくなかったと思いますけれど、そこら辺のギャップで彼は学校を辞めた——と、僕は推定したんです。

ですから、画家にとつて「絵が売れる」という事は、果たして長い目で見るかどうか？ これも、一村の展覧会で感じました。もし、東山魁夷や加藤栄三、橋本明治などと共に学校をちゃんと卒業していたら、もっと素晴らしい画家になったに違いないと思います。絵を見てみると、やっぱり粗い感じがするんです。銜いがある。だから、そういうものを全部捨て去って奄美に行つて、目が開いた。貧しくて、絵具も碌に無く、それに同情した友人の絵描きが絵具を送つたとか、色んな話がありますけど、有り体に言つてそんな状況の中で奄美に渡り開眼した。

田中一村の作品を見ると素晴らしいと思うけど、画家が良い絵を描いたり、良いものが後世に残るといふ事は難しい、本当に芸術家は大変だとすごく感じます。ですから、千葉市美術館での一村展は色々な事——一村の残念なところを批判ではなくて——美術の大変さ、難しさみたいなことを学んだ展覧会でした。

もう一つは、寄託品でお預かりしている作品なんです。勅使河原蒼風です。華道・草月流を開いた人ですけれど。その人の書があるんです。それが素晴らしいと思いました。これは、勅使河原蒼風展というような特別展ではなくて、平常的な展覧会に陳んでいたんですけれど、非常に感動しました。ですから美術館はある意味平常陳列的なものに自分の美術館が所蔵している名品を出して、特別展などのブログの情報に煽られない人が来て感動するような作品を

いつも陳べてお持ちしているという事が大事であると思いました。

まあ、美術館に憧れて、美術館で働くことが出来るようになりましたけれども、その短い体験、あるいは鑑賞者として、美術館を見ていた中で面白かった事、素晴らしい作品などについて問われれば、そんな事を思い出します。

それから、辛かった事(笑)。楽しい事は一杯あつて辛かった事は碌に無いんですが……やっぱり辻さんや小林さんが御苦労されて、いま年間で一五、六万から一八万人の入場者がある。僕がちよつと関係している東京都内で立地条件の良い私立の美術館、例えば出光美術館や根津美術館は、人が沢山来ると言つても年間一五万から二〇万人なんです。それでも、相当な努力をしないとそんなに入らない。彼らは、千葉市美術館の年間の予算の数倍の予算を掛けてやっているわけです。それで立地条件が良い。駅から一五分も歩かなければならぬような事は無いけれど、それでもその程度なんです。だからそこまで、この美術館が皆さんに愛される、皆さんに関心を持たれる美術館になったというのは、館長のみならず学芸員の努力と、それを支える職員の努力以外に無いと思います。

ただ残念な事に、私が経験しなかつた辛い思い出が学芸員達にみんなあるんですよ。だからこちらの提案に対して逃げ腰になる。トラウマなんです。「そんな目立つた事をやると叩かれる」と言うんです。「いや先生はそういうけれども、先生が館長を辞めたり亡くなつたら、私達はまた同じ目に遭う」と。悲しい事です。トラウマが学芸員や職員達に残っているのが辛いし、それを何とか解放しようとしても自分の非力を感じて益々辛くなります。段々に職員の皆さんがそれぞれに自信を持つてやつて下さると有り難いと思います。楽しい事が多いですけれど、もし敢えて言えば過去の事を引きずり過ぎている。今日集まつて下さつたような、こんなに沢山の応援団がいるじゃないか……

……ちよつと、涙声になつちやつて(笑)。自分の言葉に自分が酔っちゃ駄目

ですね。

(会場拍手)

河野 私は先程河合さんから振られて「プラテイスラヴァ世界絵本原画展」について話をしたけれども、私が一番面白いと思って見ている江戸の絵画では鈴木其一の展覧会。其一というか、「酒井抱一」と江戸琳派の全貌」展³⁷が開催されました。御覧になった方も多いのではないかと思います。大変優れた展示と図録でした。先程話が出た「喜多川歌麿展」あるいは「鈴木春信」の図録などを見ると単なる図録ではなくて、いわゆる研究カタログになっている。確かに全部の図版が紹介されたカタログであり、一つ一つの作品解説が付されたものですが、同時にそれが研究の成果となっている。そしてその研究の一部は、しっかりとした脚註のある論文として発表されている。これが、千葉市美術館が大変誇るべき、また最大の特徴であると思います。

その意味で「酒井抱一と江戸琳派の全貌」は二〇一一年の開催で、もう四年が経ちますが、優れた展示内容、本当にクオリティの高いカタログという事で記憶に残っています。そのカタログでは新しい試みが行われていて、カタログであると同時に単行本として全国に頒布された。これも素晴らしいアイディアであると心に深く残っています。

この展覧会で、私達——小林、河合、河野は「美術史3K」と言われているのか(笑)、自称しているのか——が講演を行うという事になり、小林さんと河合さんは抱一について行うので、私は其一について話しました。最近私は「講演」と言わないで「河野トーク」と言って、殆ど駄洒落トークとか笑いを取る話が多いんですが、その時も若干の私見を入れてトークをやらせて貰いました。トークの後で三人の方が質問して下さいましたが、皆さん「大変面白かった」、「楽しかった」と言って、「為になった」とか「勉強になった」なんて人は一人もいなかった(笑)。懐かしく思い出します。

そもそも、「江戸琳派」という概念を発明したのは小林さんです。それまでは皆、「琳派」と呼んでいて「江戸琳派」という言葉は無かった。それを昭和四七年、東京国立博物館の創立一〇〇周年を祝う大きな展覧会³⁸の絵画部門をプロデュースした小林さんが『ミュージアム』という雑誌に江戸琳派論³⁹を執筆して、それ以来、抱一、其一、池田孤邨といったグループを「江戸琳派」と呼ぶようになった。小林さんこそ「江戸琳派」の発明者なんです。その大展覧会が千葉市美術館で……ええと待てよ、私は何の話をしていたんだったか。最近ボケちゃって。

辻 ははは。

小林 ちよつといい？

河野 はい。

小林 今後の千葉市美術館について語り合わないといかん、と思うんです(笑)。

先程、河合さんが仰ったように、「田中一村」展は画期的だったと思います。これはもちろん千葉だけではなくて、当館の学芸員が鹿児島市や栃木市の研究者と共同した。一種神話化、偶像化しつつあった田中一村をもっと実像に即して、徹底的に調査したんです。栃木時代から始まって、東京、千葉そして奄美大島時代と……この美術館の学芸員さんは徹底するんです。近々では赤瀬川原平さん⁴⁰。あれは不幸な時期⁴¹にちょうどぶつかってしまっただけで、まあ、あの展覧会を見ることの疲れたこと(笑)。「よくぞここまで出品作品を集めたな」と思いました。その前には中村芳中の展覧会⁴²がありました。これも、もう「大阪琳派」と称して良いような、大阪出身の琳派の画家ですけれど、「こんなにあったのか」と思う程に作品を集めて……

河野 うん。あれも素晴らしい、力作の展覧会でした。私はこちらで見る機会が無かったため、細見美術館で拝見しました。ギャラリーがこちらより狭い

分、限定されていたんだと思いますけれども。

本当に素晴らしい展覧会でした。

小林 光が当たらなかったり、あるいは当たり過ぎてしまつて「目眩まし」になっている対象を徹底的に調べ、見つめ直す作業を千葉発信で行ってきたんです。これが二〇年のあゆみであつて、私はこの営みをぜひ続けて欲しい。そしてそれを、皆さんに支持して欲しい。

河合さんの努力で新しい学芸員が二人戦列に加わつたという事で、人事を進める事が大変難しい今、千葉市は……

河合 千葉市がそれを理解してくれたから。

小林 応援してくれた？ それは大変有難うございます。今、中々人を採用出来無いんです。若い人を年限で縛つたりして、本当に気の毒で。我々の頃は面接試験というか挨拶しただけで採ってくれたんですけど。

これからも、先輩達が大部分を取つて来てしまつてパワーが薄れないように、河合さんの御指導で千葉発信のエネルギーを燃やし続けて欲しいというのが望みです。

河野 うんうん。

辻 そうですね。河合さんは三年前に就任されたんでしょ？ その時に較べると何か三年ぐらい若くなつたような(笑)。

小林 ハッハッハ。

辻 こりゃあ、やつぱり適任だつたという事の証拠なんです。これからも当分、河合さんに……

河野 今、小林さんからも話が出たように、千葉市美術館は「あるべき美術館」の姿、ベクトルを守っていますよ。つまり、学芸員が汗水垂らして調査をして、その成果を発表するという、正しい美術館だと私は信じていますけれども、そういった方向性というものがちゃんと守られている。担保されている。

これが千葉市美術館の最も優れたところだと思います。歌麿展以来のカatalogueを見ると研究の成果がそこに結実している。ですから、「日本一の市立美術館」であると皆一目も二目も置くようになっていっていると思います。

小林 良い事言うじゃない(笑)。

河野 たまには。

(会場拍手)

河合 学芸員達は自分の研究の積み重ねの上に立つて長い間やって来た。どんな展覧会も手抜きはして来なかったのです。しかし研究する事自体が普通の人には中々解り難いし、成果として華々しく現れるわけはありませんから、「税金で何か学芸員が自分の好きな事をやっている」と言うような底の浅い批判がしかし根強くあるわけです。

そのような成果が花開くには、「桃栗三年柿八年、梨は一八年の馬鹿野郎」なんて言う譬の通り、果物にもそれぞれ実がなるには、時間がかかる。枇杷は九年で生りかねるでしたか。梨と枇杷は千葉の名産です(笑)。それがようやく実を結んで来たのです。これは、この長い時間を辛抱して応援していただいた皆さんのおかげです。ですから、もう一つ今後の美術館というのは、ただ何かを頂戴するという事ではなく、自立する事が大事ですね。一時、美術館は冬の時代で予算も無いし人も来ないし何も出来ないと言っていた。僕は欧米の美術館で少し仕事をした事がありますけれど、欧米の美術館では展覧会をしようとする学芸員が全部お金を自分で集めるんです。ところが日本の美術館は予算が与えられて、予算の範囲内でやればいい。だから人が来ようが来まいがその予算を超えなければかまわないわけだから、僕は「あなた達、好きな事をやっていいんだよ」と学芸員達に言うんですが、しかし、やつぱりそうは簡単には行きませんね。でも、上からお金がどんどん降つて来るわけはありませんから、今後の美術館は自立して行く、お金も稼ぐし仕事もするというシステムに

ならないと、美術館のような場所はどうも頭打ちだと思えます。

それにつけても「お金下さい」は、皆さんから頂かなければならないので、ますます友の会組織やボランティアの方などの御力を也得ながら、口だけ「美術館は市民のため」と言うのでは無く、色んな所で、やっていただける範囲で御協力頂き、美術館も自立しなければならぬ。僕は『金が無い』と言うんだつたら取って来いよ」と言うんですが、その意味で今後の美術館は、美術館が美術館らしく、自信を持って活動してゆくには、自立しないといけないと考えております。

河野 そうですね。有難うございます。

そろそろ、終了の時間が迫って来ていますが、でも、辻さん、ちよつと締め
の締めをお願いしたいな。

辻 締め役というのは長老がやることになってるんで(笑)。

えー、どうやって締めて良いのか……とにかく河合さんのすごい気合の入った御挨拶を聞きまして、「あ、この人なら大丈夫だ」と。これから美術館はどんどん良くなると思う。それから、全国的に美術ファンと言うのか、鑑賞者の層が私達の頃に比べて何倍にも増えているという事もある。それがまさに千葉市に反映している。千葉市美術館にも漸く……漸く、ではなくて、小林先生の長年の努力があつて日が当たるようになったと言う感じがつくづく致します。

今日は本当に何と言うのか、『なんでも鑑定団』をやっているみたいで、ものすごい数の方がいらつしやつて(笑)。会場の定員が一、〇〇〇人と聞いて驚いて、私は席が半分埋まつたら良いだろうと思つていたら、それがほぼ埋まつてしまつてゐるんですから、もう感激と言うか、河合さんじゃないけれど胸が詰まつて物が言えない(笑)。

いや、どうも有難うございました。

(会場拍手)

河野 御三人の方、それから会場にお越しの皆さん、有難うございました。

時間が余つたならば皆さんから質問をお受けしようかなと思つていたんですが、今、最高の締めが辻先生からありましたので、千葉市美術館の二〇周年を記念するシンポジウムを閉じたいと思います。

皆様、どうも有難うございました。

(会場拍手)

二〇一五年四月二十五日(土)
於千葉市民会館大ホール

1 注

辻惟雄 小林忠 河合正朝「歴代館長による鼎談「千葉市美術館のコレクション」」『千葉市美術館 所蔵作品一〇〇選』千葉市美術館(編・刊) 二〇一五年四月一〇日 一二二―一二八頁

2 「喜多川歌麿展(一九九五年一月三日―二月一〇日)」

3 注1. 二三、一一五、一二二、一二九頁

4 注1. 二六―二七、一一五、二八一―二九、一二九頁

5 注1. 四一、一一八、一二〇、一三〇頁

6 注1. 六二―六三、一二二頁

7 「日本の版画Ⅰ 一九〇〇―一九一〇 版のかたち百相(一九九七年九月九日―一〇月一二日)」

「日本の版画Ⅱ 一九二一―一九二〇 刻まれた「個」の饗宴(一九九九年九月二日―一〇月二四日)」

「日本の版画Ⅲ 一九二二―一九三〇 都市と女と光と影と(二〇〇一年九月一八日―一〇月二日)」

「日本の版画Ⅳ 一九三一―一九四〇 棟方志功登場(二〇〇四年八月三十一日―一〇月三十一日)」

「日本の版画Ⅴ 一九四一―一九五〇 「日本の版画」とは何か(二〇〇八年一月二日―三月二日)」

8 「開館一周年記念 珠玉の日本美術 細見コレクションの全貌と、ポストン、クリープランド、サクラの話題作(一九九六年一〇月一日―十一月一日)」

9 渡辺始興「燕子花図屏風」は同展図録一八四―一八五、二二七頁を参照。

辻惟雄「シャーマン・リー氏の思い出―一九九六年の千葉市美術館での講演など―」『國華』

第一四四三号特輯 クリーブランド美術館の日本絵画(二〇一六年一月 二九—三二頁
小林忠「渡辺始興筆 燕子花図屏風」同 図版九 五五—五六頁
「Tranquility—静謐」(一九九六年一月四日—二月二五日)
杉本博司の出品作「海景」シリーズは同展図録(千葉市美術館編 一九九六年)『Hiroshi Sugimoto』および『Tranquility』(各分冊)を参照。
11 10 「東山魁夷展」(一九九八年六月—七月二八日)
13 12 同展図録(富山県立近代美術館 千葉市美術館 長野県信濃美術館 日本経済新聞社編
一九九八年)に掲載された佐々木徹「東山魁夷の歩んだ道」一一—一五頁、辻惟雄「心の
風景画家—東山魁夷と広重」一七—二一頁および五〇—五一、一一七、一五四頁参照。
14 注13 佐々木、辻および六一、一一八—一九、一五四頁参照。
15 注13 五八—六〇、一一八—一九、一五四頁参照。
16 辻惟雄「奇想の発見 ある美術史家の回想」新潮社 二〇一四年六月三〇日(初出『芸術
新潮』二〇一二年七月—二〇一四年一月)
17 大英博物館では一九九五年八月三十一—九月二二日に開催された。
18 その後「春画展」は永青文庫で開催された(二〇一五年九月—一九九一年—二月二三日)。
19 「青春の浮世絵師 鈴木春信—江戸のカラリスト登場」(二〇〇二年九月二四日—一〇月二
〇日)
20 「浦上玉堂」(二〇〇六年一月三日—二月三日)
21 川端康成旧蔵の《凍雲飾雪図》はその後、「大和し美し 川端康成と安田靫彦」(二〇〇九
年四月四日—五月一日)でも展示された。
22 「田中一村 新たなる全貌」(二〇一〇年八月二日—九月二六日)
23 「生誕一三〇年 橋口五葉展」(二〇一一年六月一日—七月三十一日)
24 河野元昭「中林竹洞筆 山水図襖『國華』第二二七九号」二〇〇二年五月 [二四]—二
九、「三五」頁および注1 四二—四三、一一五、一一八、一三〇頁
25 浦上玉堂《雨褪臙脂図》を指す。注1 四〇、一一五、一一八、一二二、一三〇頁
26 「春季特別展『バーネット・ニューマン 十字架の道行き』(MHO MUSEUM 二〇一
五年三月—四月—六月七日)
27 「江戸の鬼才 曾我蕭白展」(一九九八年三月二四日—五月五日)
28 舞踏家・大野一雄(一九〇六—二〇一〇)による公演は会期中の四月一七日に開催された。
29 「ラヴィッツ・コレクション 日本の絵本」(平水浮世絵美術館・横浜、神奈川 一九九四
年一〇月—一九九一年一月三〇日)
30 「仏像半島—房総の美しき仏たち」(二〇一三年四月—六月—六月二六日)
31 「房総の神と仏」(一九九九年一月二日—二月二日)
32 『國華』第二二六五号 二〇〇一年三月
33 巻頭の國華編輯委員会(辻惟雄)による「房総の仏像」特輯に当つて」には、「房総の神と
仏」展が戦後の文化財調査の成果を踏まえ、「……房総の宗教美術の遺産を、埴輪から浮世

絵師の絵馬にいたるまで初めて総合的に展示したもので、集められた遺品の多様さや、と
くに仏像にすぎたものの多いことが関係者の注目を浴びた」とし、特輯号を編む意義が
記されている。また文末には、「本誌での仏像の紹介は、これまで奈良、京都に所在する中
央作に重点を置いてきたが、この特輯を契機にして、今後は関東の他の地域、さらには全
国の各地域に視野を広め、それぞれの特輯号を続行して行く予定である」とある。
34 「須田悦弘展/須田悦弘による江戸の美」(二〇一二年一〇月三—二〇一二年一六日)
35 「尾形光琳展/三〇〇年忌記念特別展『燕子花と紅白梅』 光琳アート—光琳と現代美術」
(MOA美術館 二〇一五年二月四日—三月三日)
36 ここで言及されている須田の《梅》(二〇一四)はその後、千葉市美術館で開催された開館
二〇周年記念展「杉本博司 趣味と芸術—味占郷/今昔三部作」(二〇一五年一〇月二八日
—二〇一六年三月三日)で杉本の《月下紅白梅図》(二〇一四)と共に展示された(杉本の作品も
MOA美術館の展覧会に出品されている)。
37 「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」(二〇一二年一〇月一—二〇一二年一
三月)
38 「創立百年記念特別展 琳派(東京国立博物館 一九七二年一〇月一—二〇一二年三月)
39 小林忠「特集・琳派」 依屋宗理について「MUSEUM」第二六〇号 一九七二年一
月 [二]、四—二頁
同論文では冒頭、江戸琳派の成立を「……化政期に至つてようやく訪れた江戸文化の成熟
は、宗達に始まり芦舟、始興など光琳一派の輩におよぶ京琳派とは別の、独自の風韻を保
つ江戸琳派を生み出すことになった」(四頁)としている。その先駆となった初代依屋宗
理が活動した背景について、「宗理が琳派画風を唱へて一家の風を形成していった時期
が、十八世紀の後半に入った明和、安永期であったことは、興味深い。一般的に江戸文化
が上方文化への追従から脱して自立の機運を萌すのが、まさにこの時期に当たっているから
である。絵画界における京都画壇からの離脱は、主として文学性を抑制した合理的視覚の
獲得という観点に発するものであった」(二頁)とし、彼が果たした役割について、「……
なによりも、江戸における宗達光琳派への世人の関心を持続させた功績にあった。それは
は、近世初頭より京都に根ざし発達した琳派という装飾絵画の流脈が、その地においては
広範な絵画活動一般の内に拡散して吸収され、むしろ異郷の地ともいうべき江戸に蘇活す
る不思議の土壤を準備するという、宗理自身にとっても思いがけない役割であった。やが
て酒井抱一という生来文人士大夫の風格を備えた偉大な個性が現れ、宗理が可能性をのぞ
かせながらついに果し得なかった江戸琳派の本格的な開花をもたらすことになる。それ
は、宗理の歿して三、四十年のちのことであった」(二頁)と記し、論文の締めくくりと
している。
40 「赤瀬川原平の芸術原論展—一九六〇年代から現在まで」(二〇一四年一〇月二八—二〇一
四年三月三日)
41 赤瀬川原平は千葉市美術館での展覧会直前、一〇月二六日に亡くなった。
42 「光琳を慕う 中村芳中」(二〇一四年四月八日—五月二日)

Tales from the Museum of Art Directors, Past and Present

Chair: Kōno Motoaki

Panelists: Tsuji Nobuo / Kobayashi Tadashi / Kawai Masatomo

Introductory greeting: Kumagai Toshihito (Mayor of Chiba)

2015 marked 20 years since the opening of Chiba City Museum of Art. In celebration of this event, Chiba City Museum of Art has published *100 Selected Works from the Chiba City Museum of Art Collection*, a selection made by the three Directors past and present: Tsuji Nobuo, Kobayashi Tadashi and Kawai Masatomo. It has also held an exhibition based on its collection: “An Exhibition of Important Works Selected by the Directors Past and Present” (duration: April 10–May 10; May 19–June 28, 2015). The Directors at the Chiba City Museum of Art have all been scholars specializing in the history of art who have brought their expertise to bear in the purchase of artwork and the hosting of exhibitions.

A Symposium, with a panel of past and present Directors of the museum of art, was held on April 24 to coincide with the exhibition, and took place in the Large Hall at Chiba City Civic Hall. The role of Chair was performed by Kōno Motoaki, fellow history of art scholar and acquaintance of all three panelists. The Symposium began with a greeting from Mayor of Chiba, Kumagai Toshihito.

The past and present Directors spoke of memories of acquiring artwork, of difficult episodes, of reminiscences on the “Kitagawa Utamaro Exhibition” held at the time of the museum opening in 1995 and on the many other exhibitions built on international viewpoints and cooperation that followed, and of future plans for the museum. At Chiba City Museum of Art, acquisition of works of art that were to form the framework of the museum began in earnest in 1990. Acquisition policy focused on Pre-modern to Modern-period Japanese paintings and prints, contemporary artworks and those produced since World War II, and artworks connected to the region of Bōsō where Chiba City and the museum now stand. This exhibition too is in keeping with the original acquisition policy.

Fundamental to the museum of art has been the engagement between two elements: academic research and business, without which its activities would never have come to fruition. The Symposium came to a close with a reiteration of this important fact.

(Translated by Barbara Cross)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第十八号

二〇一六年三月一日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

〒〇一八七三 千葉市中央区中央三―一〇―八
電話 〇四三―二二二―二三一一(代)

翻訳協力―バーバラ・クロス

制作―印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.18

March 1, 2016

Edited and Published by

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN

Phone. 043-221-2311

Translated by

Barbara Cross

Produced by

Insho-sha

ISSN 1343-148X